

一 遺跡の位置と環境

天草は有明海・不知火海に面し、大矢野島・上島・下島等の大小の島々から成る。これらの島々の海岸線は、海進・海退、隆起・沈降等により出入りが激しい。^{註1} 平野部はごく狭く、さほど高くない山から海岸部へ向かってのびる傾斜地が多く、ナラ・マツ・クス等が二次林を形成し、ツツジ・シダ等が繁茂している。海岸は遠浅で、周辺海域は有数の漁場となっている。

天草における古墳のほとんどは、海岸に突出した岬の丘陵端に立地している。そのうち大矢野島・維和島・松島・上島北沿岸部、そして三角町戸馳島・宇土半島先端部を含む地域は、大小の瀬戸に面して古墳が密集し、この地方におけるひとつの分布の中心をなしている（第1図）。これらの古墳の内部主体は箱式石棺・竪穴式石室・横穴式石室等様々のものがあり、墳形はすべて円墳である。古墳の多くは古墳群を形成しており、そのあり方にもいくつかの型が見うけられる。千崎古墳群のようにこの地域で卓越する箱式石棺を内部主体としているものは数十基が群集している。やや大型の横穴式石室を内部主体とし、その構造に有明海沿岸部の古墳との関係が指摘されている大戸鼻北古墳・長砂連古墳、また竪穴式石室を有する成合津古墳等は一基ないし数基で存在しており、小型の横穴式石室を内部主体とする古墳は十数基で一群を成している。時代比定できる具体例に乏しいが、箱式石棺は古墳時代初期から用いられ、竪穴式石室は5世紀後半、^{註2} 小型の横穴式石室が成立するのはそれ以降とされている。

カミノハナ古墳群（松島町永浦島字上）のある永浦島は、大矢野島・上島に挟まれた地域の群島のひとつで、東西に長い。平野は字永浦にわずかにある他は、海岸より標高30m前後の丘陵となり、天草全島に共通する自然環境を呈している。当古墳群は小型の横穴式石室を内部主体に持ち、島の東端に突出した丘陵頂からのびる尾根上に群集する。柳ノ瀬戸をへだてて大戸鼻古墳群・広浦古墳群・長砂連古墳と相對している。また、永浦島の中央部にはモへ山古墳があり、狭い瀬戸をへだててその西側に位置する樋合島には瀬崎古墳をはじめとした数基の古墳が群集する。（西住）

註1 「続日本紀」 天平16年5月16日の地震により沈降したと考える研究者もいる。

註2 阿部堅二・今井義量・山崎純男・西健一郎・松本健郎・三島格「熊本県天草郡成合津古墳調査概報」『熊本史学』第50号記念特集号 1977



第1図 カミノハナ古墳群位置図

1. 平松古墳群 2. オザギ古墳 3. 重盛山古墳群 4. 越路古墳 5. 鳥崎古墳群 6. 際崎古墳群 7. 磯山古墳群 8. 田井の浦古墳 9. 鬼塚古墳 10. 辺田古墳群 11. 大崎古墳群 12. 寺島古墳群 13. 成合津遺跡 14. 成合津古墳 15. 女鹿串古墳 16. 串遺跡 17. 賤之女遺跡 18. 諏訪原横穴 19. 鳩之釜遺跡 20. 犬飼横穴群 21. 小波戸遺跡 22. 田端横穴群 23. 大渦遺跡 24. 治郎田遺跡 25. 荒木浜遺跡 26. 小瀬戸遺跡 27. 長砂連古墳 28. 貝場遺跡 29. 柳石棺 30. 西小柳古墳 31. 終ヶ浦古墳群 32. 野牛島遺跡 33. 禿島遺跡 34. 梅ノ木遺跡 35. 浮牟田北古墳 36. 浮牟田南古墳 37. 梅ノ木貝塚 38. 千崎古墳群 39. 桐ノ木尾羽根古墳 40. 千崎住吉祠古墳 41. 桐ノ木墓地古墳 42. 弓田貝塚 43. 弓田古墳 44. 仙十郎瀬古墳 45. 北ヶ島古墳 46. 和田島遺跡 47. 越路北古墳 48. 越路南古墳 49. 大鷲浦古墳 50. 白須古墳 51. 上大戸鼻古墳 52. 広浦古墳群 53. カミノハナ古墳群 54. モへ山古墳 55. 宮島古墳 56. 山見古墳 57. 保ヶ島古墳 58. 梅ノ木古墳 59. 塚大明神古墳 60. 瀬崎古墳 61. 船人島石棺 62. カルワ島海底遺跡 63. 前島貝塚 64. 梅殿塚古墳 65. 阿村鬼塚古墳 66. 大戸鼻古墳群 67. 楠浦鬼塚古墳 68. 水車古墳 69. 前島古墳 70. 新地古墳 71. 荒瀬古墳 72. 台田古墳 73. 大間崎古墳群 74. 白当古墳 75. 大浦古墳群 76. 竹島古墳群

二 調査の目的と経過

近年肥後における横穴式石室の系譜が問題となり様々に論じられているが、天草における横穴式石室の様相はごく一部の古墳を除き明確にされておらず、その出現・終末についても論拠とすべき資料は少ない。天草の古墳はすでに破壊されたものも含めると200基以上に及ぶ。その占地・自然環境・生産基盤の問題等の要因より、海洋性の強い文化であるという指摘がなされている。^{註1}この地域では箱式石棺墓の発達^{註2}が顕著であり、墳丘を有する積石塚が存在する等、肥後の中でも独自の古墳文化の展開が見られる。それと同時に石障系古墳・地下式板石積石室墓の存在、装飾古墳のあり方等に九州西部有明海・不知火海沿岸部、九州南部内陸地域との関係も注目される。この様な天草の古墳文化における横穴式石室発展過程の一端を把握するために、現在進行中の松島町史編纂事業に併行して、カミノハナ古墳群（図版1）の調査を企画した。

カミノハナ古墳群は昭和31年に坂本経堯氏によって調査され、その際9基の古墳が確認された。^{註3}丘陵頂部にある1号墳は小規模な発掘によって周濠が認められ、墳丘から埴輪・土師器・須恵器が採集され、2号墳は石室内清掃が行なわれている。今回の調査では、すでに開口している2～5号墳の4基の石室の清掃・実測を行ない、同時に周囲の測量をして墳丘の位置関係を把握することにした（第3図）。

調査は昭和56年3月27日より実施した。測量に伴い付近を踏査したが、墳丘は8基しか確認できなかった。最北の丘陵頂部の古墳より南へ走る尾根上に並ぶ4基を1～4号墳、3号墳より西へ分かれた尾根上の3基を5～7号墳、4号墳の西下のものを8号墳と仮称した。併行して周辺の踏査を行ない、古墳群西下の海岸で土器片を多数採集した。予定していた期間中雨にたたられ、また石室内に堆積した土砂の量が予想以上であったため、4月4日に本隊が撤去した後も4月23日まで断続的に調査を続行した。
(宮本)

註1 肥後型石室の成立の問題、石障系古墳の問題等である。

註2 坂本経堯・経昌『天草の古代』1971、井上辰雄『火の国』1971

註3 坂本経堯・経昌『天草の古代』1971、坂本経堯「天草の古代—松島地区調査概報—」『熊本史学』第10号 1956、なお、坂本氏調査の1号墳、2号墳は、今回の調査で仮称した1号墳、2号墳と一致すると思われる。

三 調査の概要

1号墳（図版2上） 1号墳は、丘陵頂部に位置する径約13m、比高約1.5mの円墳で、当古墳群中最大の規模を持つ。墳丘頂部は既に削平されており、石室上部が破壊されて露出している。石室は西に開口する両袖型横穴式石室で、石室の奥壁が墳丘の中央に位置すると推測される。この古墳は、以前坂本経堯氏が調査を行なった時の1号墳に相当すると思われる。坂本氏によれば、墳丘上からは埴輪が、周囲には濠が認められたというが、今回は埴輪・周濠ともに確認することができなかった。

2号墳（図版2下、6） 1号墳から尾根上を南に約47m下った所に位置する径約10m、比高約1.1mの円墳である。墳丘の頂部が削平されており、石室が露出していた。石室は西に開口する両袖型横穴式石室で、石室の中心が墳丘の中央に位置する。石材の多くは砂岩である。羨道は閉塞石からの長さ約0.9mである。右壁は厚い板状の石を立てて側壁となし、左壁の大半は破壊されていた。床は玄室に向かって下降している。玄門は両袖石と板状の閉塞石によって構成されている。羨道内は径20cm前後の砂岩礫と土がつまっていた。玄門近くでは、この上にブロック状の石数個が控え積みされていた。これらの石は、玄室周囲に連なるブロック状の石の一部を成すものである。玄室は長さ約1.9m、幅約1.3mの長方形プランを呈する。玄門から約10cm奥壁寄りの所に長さ約60cm、高さ約7cmの薄い闕石が配置されている。左・右と奥の三壁には、一枚板の腰石を配している。左右両壁の腰石は厚さ10cm内外で、奥壁の腰石より薄い。両側壁の構築法は、左壁の玄門寄りの所で観察したところによると、まずブロック状の石を40cm程度平積みし、その内側に腰石を配し、腰石より上部の石は腰石の上端に渡しかけながら構築している。しかし、玄門側の半部では腰石の上に積み石がかかっておらず、腰石としての機能を果たしていない。奥壁の両隅では、腰石上端から上は石を抹角状に配して積み上げている。床面は黄褐色の粘質土で、玉砂利が敷かれていた。排水溝は検出されなかった。玄室左壁の高さ約48cmの積み石の間より鉄製刀子が1本、同じく左壁近くの床面より鉄剣と鉄製刀子が重なって1本ずつ出土した。これらにはすべて柄の装着痕が観察される。羨道内からは、土師器・須恵器の小片が数点出土した。 (米倉)

3号墳（図版3上，7，10） 2号墳の南9mに位置する、径約12m、比高約1.6mの円墳である。調査前は玄門付近の羨道部と玄室の羨道部寄りに盗掘孔があり、墳丘上には石材が多量に散在していたが、盗掘孔は床面までは達していなかった。天井石は石室から離れた墳丘の裾に1点見られた。主体部は西に開口する両袖型横穴式石室で、玄室の奥壁が墳丘のほぼ中央にある。羨道は確認できる範囲では閉塞石よりの長さ約1m、幅約90cmで、玄門に向かって下降している。また、盗掘を免れた部分より推察すると、本来羨道部は塊石と粘土で埋められていたらしく、従って、閉塞は玄門部でなされたと思われる。玄室は長さ約1.9m、幅約1.4mの長方形を呈す。玄門の内側には幅15cmの闕石を高さ5cmに配す。床面は黄褐色粘土の上に5cmほどの厚さに玉砂利が敷かれており、左壁・奥壁の方へ僅かに傾斜していた。排水溝は検出されなかった。左右壁・奥壁は床面より高さ35~60cm、厚さ3~25cmの「石障」状の巨石が上方に向かうに従いやや内傾して据えられている。その上部からはブロック状の石材を平積み持ち送りに構築しており、奥壁の両隅は抹角状に石を積んでいる。石材の多くは砂岩である。

遺物は墳頂部で鉄刀片が1片出土した他、すべて玄室床面に敷かれていた玉砂利の上、あるいは玉砂利に挟り込むような状態で出土した。検出場所は4ヶ所に大別できる。まず奥壁中央付近一帯から、丸玉・小玉・勾玉・耳環等が部分的に列をなすように検出された。次に左壁側では、中央付近から須恵器片・鉄鏃片が出土した。右壁側では、中央付近から奥壁にかけて一振と思われる鉄刀片・鉄片等が確認された。また右袖石寄りの一帯では、闕石直前に横矧板鋌留甲冑の残欠が径25~30cmほどの半円状に折り重なり、上へ向かってすぼまる状態で検出され、これに連なるようにさらに右壁へかけて、鋌を有する鉄板片・鉄鏃片・刀子片等が散乱していた。その他右袖石隅から若干の須恵器片が出土した。玄門部近くはやや荒らされた形跡も見られるが、奥壁近くは埋葬時のままとと思われる。また須恵器の形式により追葬のあったことも考えられるが、層位的には把握されなかった。出土遺物は下記の通りである。

鉄製品：横矧板鋌留甲冑残欠140片以上，鉄鏃5本以上，鉄刀2振以上，刀子2本以上。 装身具：勾玉3個，丸玉48個，小玉232個，耳環4片。 土器：須恵器片56片（大甕4、坏蓋13、坏身3）。

（山口・鳥越）

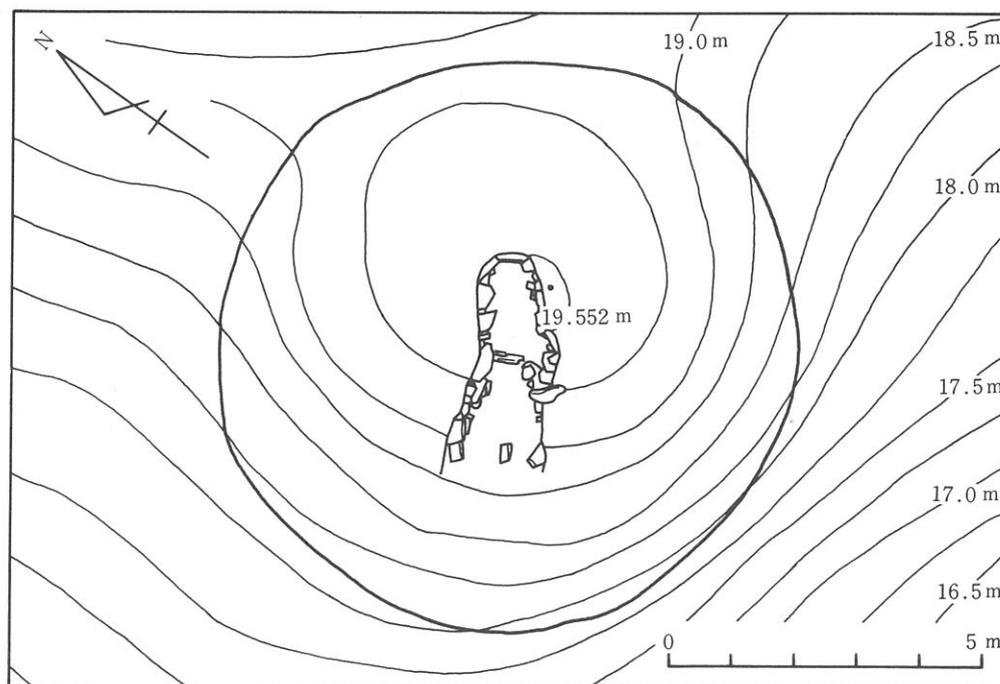
4号墳（図版3下，8） 3号墳より南へ約5mに位置する径約11m、比高約1mの円墳である。調査前は石室の上半部が破壊され、天井石が石室内に落ち込んでいた。主体部は西に開口する両袖型横穴式石室で、石室の中心が墳丘のほぼ中央にあたる。羨道は幅約85cm、閉塞石からの長さ約85cmで、二枚の板石を立てて両側壁が作られ、床面は闕石の高さまで下降している。その内部は小児頭大の石と粘土の詰土で埋められていた。羨道の仕切りを示すと思われる石列は、墳丘をめぐる裾石の一部を成している。玄門は羨道側より二枚の板石で閉塞されている。玄室は長さ約1.75m、幅約1.2mの長方形を呈し、両袖石の内側には長さ約1.2m、幅約15cmの闕石を床面より約20cmの高さに配している。両側壁・奥壁とも大きな腰石を据え、その上端からブロック状の石を平積み持ち送りにしており、奥壁両隅は抹角状に構築されている。腰石は奥壁高さ約70cm、右壁高さ約80cm、また左壁は二石を用い各々長さ約1.35m、高さ約58cm、長さ約60cm、高さ約55cmである。用材はほとんどが砂岩である。床面は黄褐色粘土の上に玉砂利を敷きつめてあり、排水溝は検出されなかった。遺物は羨道部詰土より須恵器甕片・土師器片が、玄室覆土より須恵器片が、左側壁側の床面上で長さ約19cmの鉄剣一振が出土している。 （古荘）

5号墳（第2図，第4図，図版4上，9） 3号墳から西に約7mの所に位置し、径約9.5m、比高約1.5mの円墳である。調査前は玄室上部は露出し、羨道部はほとんど破壊され、天井石が落ち込んでいた。主体部は西に開口する両袖型横穴式石室で、石室の中心が墳丘のほぼ中央に位置する。羨道は幅約70cmで、床面が玄室に向かって下降し、左側袖石の頂部に控え積みの石がかかっていた。玄室は長さ約1.7m、幅約1.1mの長方形プランで、奥壁・右壁に高さ約70cm、幅約12cm、左壁に高さ約40cm、幅約10cmの巨石を「石障」状に配する。左壁玄門付近の状態から推察すると、巨石の背後からブロック状の石が平積みされておられ、巨石の上部からは持ち送り式に積まれている。奥壁両隅は、「石障」状の石より上に扶角状に石が配されている。石材の多くは砂岩である。床面は明褐色の脆い小石を含む明黄褐色の粘性の強い土で、奥壁下、およびその周囲にのみ径5～8cmの石を並べ敷く状態が見られる。排水溝は発見されなかった。玄門内側には長さ約45cm、幅約10cmの闕石が床面より約10cmの高さに配され、そのすぐ玄室側に厚さ3cm程の板石がある。遺物は出土しなかった。 （永目）

6号墳（図版4下） 3号墳から西にのびる小さな尾根上に一列に並ぶ4基の円墳があり、6号墳は東より三番目、5号墳の東約6mに位置する。東側に比べ西側の墳丘の境は不明確で、墳頂部は削り取られ、石が散乱している。現状は径約9m、比高約1.3mである。石材の露出状態より、西に開口する横穴式石室で、玄室は長さ約2m、幅約1.2mの長方形を呈すと思われる。

7号墳（図版5上） 6号墳の西約8mの崖の端近くに位置する。石の散乱がなければ墳丘と見わけられないほど低平に削り取られ、墳丘の境もはっきりしない。現状は径約6m、比高は50cmにも満たない。石室下部の残存状態を見ると、西に開口する横穴式石室で、玄室プランは長方形を呈している。

8号墳（図版5下） 4号墳より西南約7m、海を望む尾根上にある円墳で、墳丘上に小児頭大の石塊が無秩序に散乱し、アラカシの木が繁っている。そのため、墳丘の西側の境は不明確で、主体部の推察も困難である。現状は径約8m、比高約2mである。
（古城）



第2図 5号墳丘測量図

四 ま と め

今回実測した4基の石室はいくつかの共通した特色を持つ。つまり長方形プランの玄室、形式的な玄門・羨道を持つ小型の横穴式石室であること、玄室の奥壁・両側壁下半に巨石を配し、奥壁両隅は巨石上部より抹角状に石を積み石室を構築していること、羨道は玄門に向かって下降していること等である。玄室下半の巨石は4号墳では腰石状に用いられているが、他の3基では巨石の背後に石積みが見られ、石材を部分的に巨石の上に渡しかけながら天井部へと持ち送られており、腰石としての機能を果たしていないものもある。その厚さも石室によってまちまちであり、5号墳においてはいわゆる「石障」と同様の構造となっている。類似の石室は天草地方に数基見ることができ、天草の横穴式石室の系譜を考える際重要な問題である。今後の調査で墳丘にトレンチを入れ、石室の背部構造を明らかにすることを課題としたい。

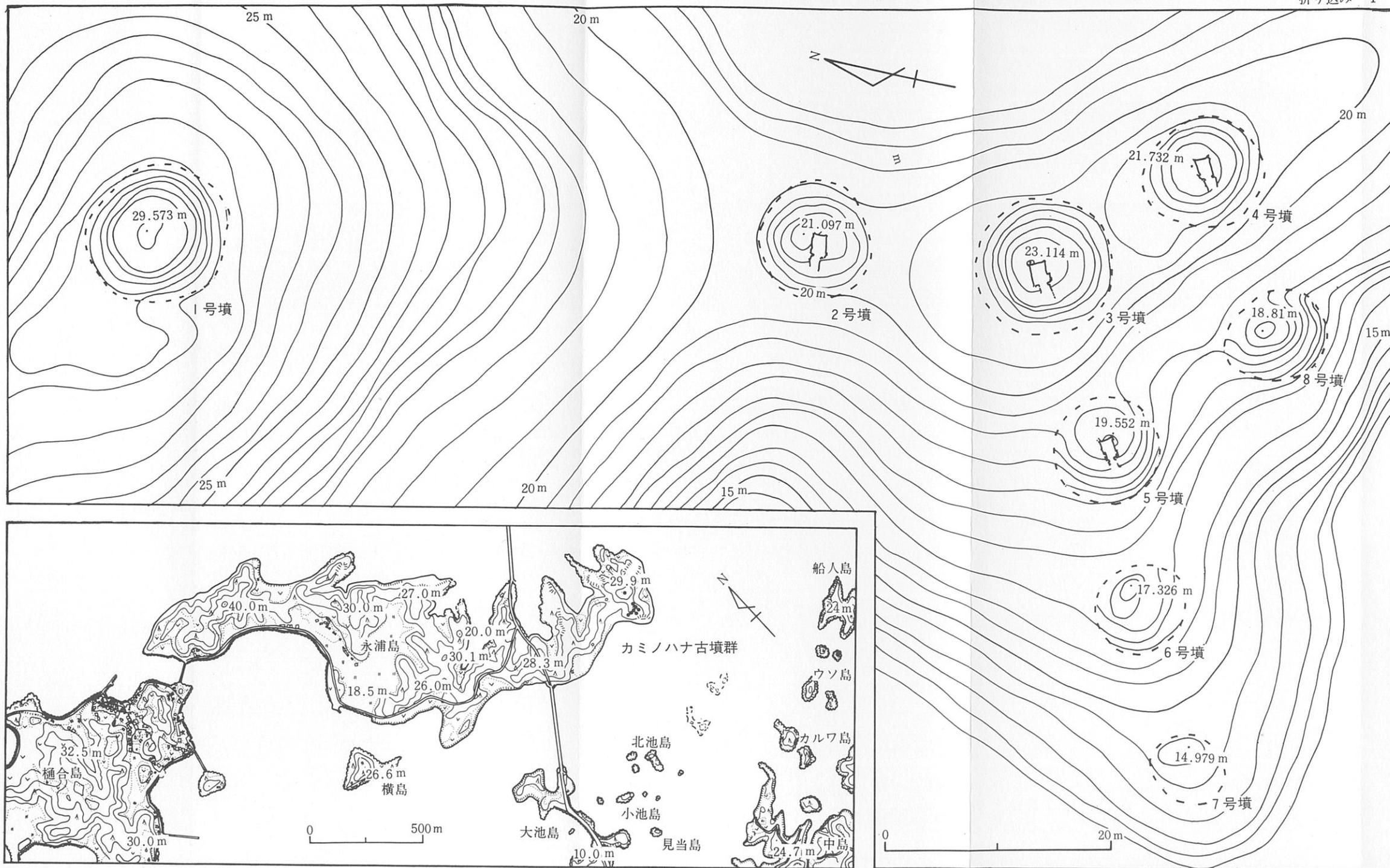
カミノハナ古墳群の現存する8基は、その占地状況、墳丘内での石室の位置の変化を辿ることにより、その築造に時間的経過を認めることができよう。今回清掃を行った4基の石室は、3号墳を除いては出土遺物がごく少なく、1号墳で採集された遺物^{註1}も実見できず、古墳群の成立から終末までの期間を把握することはできない。しかしそれぞれの石室より出土した古式と思われる須恵器片、3号墳より出土した横矧板鋸留甲冑等より、以前考えられていた如く2号墳以下を古墳時代終末期のものとして把握^{註2}することに疑問を持たざるを得ない。また、古墳群中に埴輪を持つ古墳、甲冑類を副葬する古墳があることは、自ずと被葬者集団の性格を示すものと思われる。

また、古墳群西下の海岸からは多数の土器片が採集される。遺物は海岸全域に散在するのではなく、小さな入江の比較的浅い所のみ見られる。それらの遺物は弥生時代後期から古墳時代前期にわたり、カミノハナ古墳群の形成期とは一致しないが、古墳群を築造した人々の集落との結びつきを考える上で大変示唆に富むものであろう。

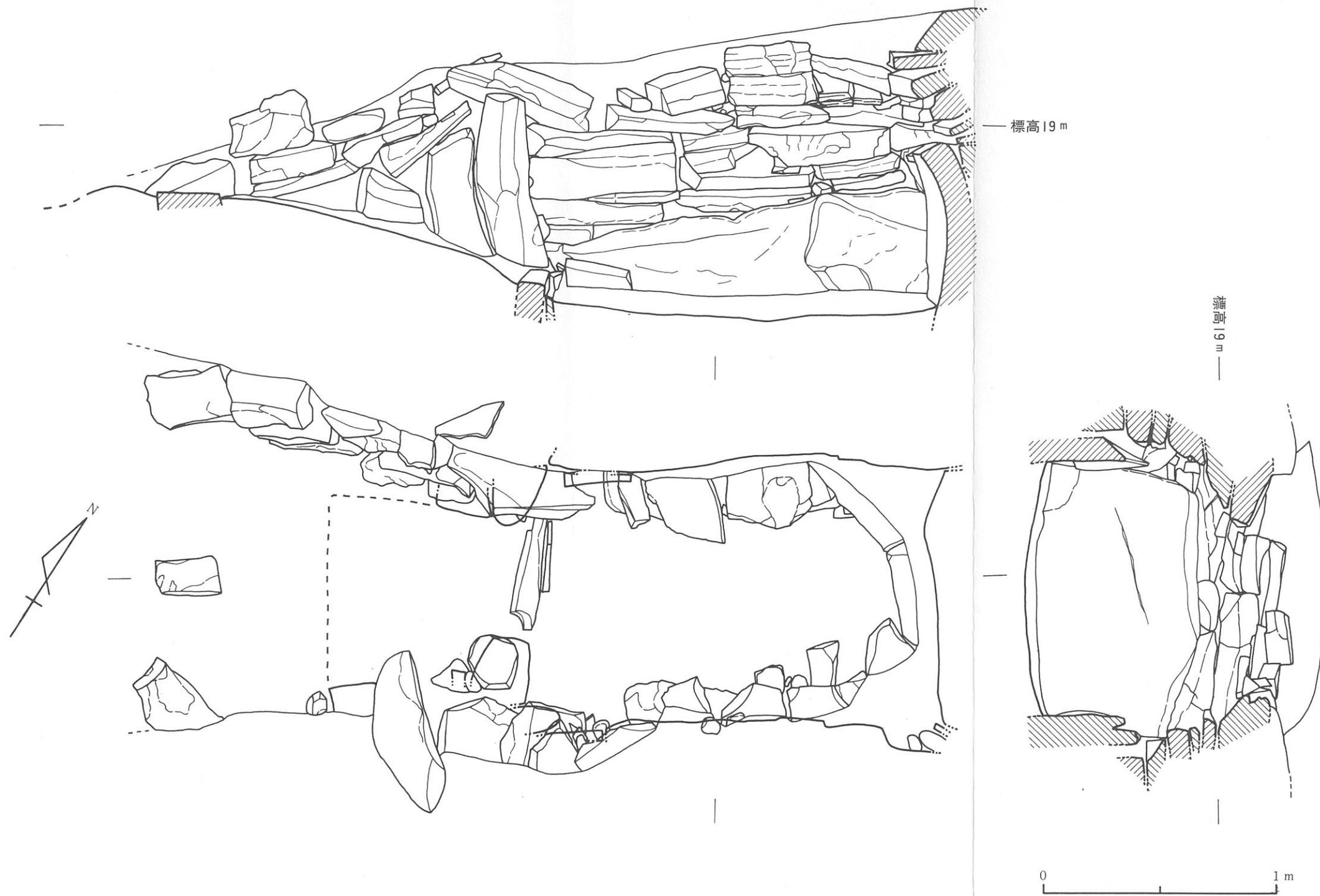
(宮本)

註1 松島町教育委員会に「梅殿塚出土」として保管されている一連の遺物は、カミノハナ古墳群の出土遺物である可能性も考えられる。

註2 坂本経堯・経昌『天草の古代』1971、坂本経堯「天草の古代—松島地区調査概報—」『熊本史学』第10号 1956



第3図 カミノハナ古墳群地形測量図



第4図 5号石室実測図